

金属部会長便り(2024年10月号)2024年10月3日発行(第39号) 田中和明個人の意見・感想で部会の総意ではありません。

部会長便り第39号

## 1 直近の活動

9月1日(日) 幹事会

9月8日(日)金属部会CPD技術セミナー「最新技術3」

9月18日-19日金属学会(大阪) <<<ここで直談判

9月22日(日) 企業内技術士勉強会(第19回目)とBOR議論、技術者倫理講義

9月23日(月) 顧問会

9月29日(日) 定例部会・千葉県支部

## 2 今後の活動予定(直近1ヶ月分)

### 10月以降行事

10月4日(金) 北海道全国大会・部会見学会「北海道科学大学」

10月5日(土) 北海道全国大会総会、懇親会

11月24日(日) 金属部会CPD技術セミナー「歴史金属学2」

12月1日(日) R6問題検証会

12月8日(日) 定例部会・役員会(早めます)

## 3 部会四方山

▶いつの間にか、2024年も残すところあと3ヶ月となってしまった。今年が始まったときにはまだまだだと思っていた北海道全国大会も明日からだ。▶部会活動は、プライベート活動時期が重なってしまう。これを書いているのは顧問会直前の東京新宿のシェアオフィスにて。今日はこれから顧問の皆さんとの意見交換会だ。昨日は、企業内技術士の19回目の勉強会。思えば長く続いている。そのほか、来週は、千葉県支部からの定例部会、前日に三人会と音楽会鑑賞と予定がどっちらり。9月はそのほか、8日の技術セミナーで無謀にも「システム技術」の講義をしてしまった。ちょうど、会社の工事立ち合いとかちあい、セミナー時間だけ現場を抜け出しての講義だった。DXなど浮世離れした講義を、リア充丸出しの60トン台車の10年ぶりの車輪交換を台車の下に潜り込んでしながらやるものだから、頭の中というより気持ちが悪った煮状態。▶そうそう、先週の水木は、酷暑の中、大阪豊中で行われた秋季金属学会講演大会に参加していた。夜の懇親会が目当てだったが、さながら会社同窓会の感覚だった。北海道から九州までの大学やNIMSの金属系教室の教授連中が10人くらい和鐵の周りに寄ってきて、昔話で盛り上がった。和鐵が最年長近いので、ほとんどの教授連中に「和鐵さんに、『勉強してから出直してこい』と怒られた」と言われたが、和鐵がそんなに失礼なやつだと自分では全く自覚がなかった。嫌なやつだったんだろうな。▶そんな連中が学会で活躍しているのは「ちょっと頼りないなあ」と思う半分「あいつらも成長したな」との気分でいっばいだ。来年の春の金属学会で『技術士紹

介』シンポジウムの話も、まあ審査する側がこの人たちなのですんなり通ってしまった。あとは、どれだけ常識の斜め上をいくかが課題だ。頼むよ金属部会の皆さん。お行儀よくするなんて真平ごめんだからな。▶三連休の前半の21日は、朝からTBSの世界遺産のナレーションの監修作業にどっぷり浸かっていた。和鐵の文章を鈴木亮平くんが読んでくれるようなので、まあ放映がみものだ。でも、10月10日ナレーションの収録らしく、直近きたメールでは来年になるようなことも書いてあった。たった30分の番組なのにこの作業は疲れる。もう一回やれと言われれば考えさせてもらう。22日は社長に頼まれた熱処理講義用の動画作成、23日中に絶対送り返してくださいと頼まれている秀和システムの最終グラフ校正をやっている。本当は映画を2本見に行きたいんだが10月1日の印刷開始までの我慢だ。でも、そのあと、12月に出す予定の小説のイラスト書きが待っている。10月、11月も土日を中心に6件の工事が入っており、和鐵発案の新型炉も設計が大詰めを迎える。12月後半に2週間土日振替休暇をとって、技術士会もテレビも出版社も、会社も連絡を絶って、海外で小説の次に出すの本の原稿書きをするのが今のところ当面の目標になっている。▶忙しいとかいう感覚はない。忙しいとは忙しくない状態の楽しみ方を知っている人の感覚だろうが、時間が全部うまり、次から次へとイベントが続く状態が楽しいものだから、きっとやることがないと途方にくれると思う。

## 5 和鐵管見37

▶秋になると映画館の映画が楽しくなる。最近では、東京で見るケースがめっきり減って、もっぱら海老名のイオンシネマに入り浸っている。『もしも徳川家康が総理大臣になったら』は、歴史上の偉人オールスターズがコロナで疲弊した現代日本に一年限定でAIで大復活!。コメディとも取れするし、ビジネス映画とも取れる。なかなかの怪作。嫌いじゃない。▶『エイリアン：ロムルス』もなかなか面白かった。これはエイリアン好きの和鐵としては見逃せない一作。みてよかった。ていうか、エイリアンの第一作目の世界観を引き継いでいる。2、3、4でなんか会社批判の映画になり、人類の誕生物語みたいな派生映画や宇宙人と戦うシリーズまでできたが、今回の映画は、完全に原作の世界観を引き継いでいる。和鐵が初めてエイリアンを見たのは大学3年生のとき、京都八坂神社斜め前にある祇園会館でだった。ここでは準封切外国映画を2本立てで格安料金で見れた。この日はオールナイトでエイリアンだけだったので、4回連続で見たのが最初だ。▶京都の学生の映画館需要はそれほど頻度が高くない。デートコースの映画館とは異なり、学生需要を満たす映画館の最高級が祇園会館、中くらいが京都市左京区の一乗寺に「京一会館」という名画座があった。京都の一乗寺にあったので、京一というわけだ。東映の任侠映画、日活ロマンポルノ、無国籍アクションものを好んでみた。柔道部の練習の合間にチャリで通った。バイトのない土曜の夜はこれまたオールナイトで4本、6本立てが激安料金で見れた。もうあんな雰囲気映画館は数えるほどしかない。東京なら早稲田大学の近くの高田馬場にある名画座の早稲田松竹くらいしか思い当たらない。コロナ前には、和鐵は何を勘違いしたのか一念発起して、早稲田大学の土曜フランス語講座に入学し、授業に行った帰りによくここで2本立てでみた。フランスなどの洋物映画が見れたので一時期は毎週のように通った。金曜日の夜に本社で遅くまで仕事をして、君津に帰り損ねたことにして代々木の

寮に泊まり、翌日午前中にフランス語講座に出るというわけだ。生徒は20人くらいの社会人とかほとんどがとてもお年を召したマダムで、教室に入ると「ボンジュール、マダム」「ジェベアパリ、ペダン コンビアーン ドゥ テンプ」などの会話が飛び交う。和鐵は、ここでフランス語を話せるようになって、65歳で会社を卒業したらパリのソルボンヌ大学の絵画歴史コースに1年間自費留学するつもりだった。1年間ここで学べば、卒業式にマントと帽子を着られる。それを夢見てせっせと学校に通っていた。なぜ、65歳でフランス留学かというのと、和鐵の奥さんのシロ子さんのお母さんが丁度65歳で立命館大学の経済学部を受験し、4年間滋賀県草津にあるキャンパスで女子大生をやっていたのでそれに憧れたのだ。今更日本の大学を受験しても面白くないので、和鐵が好きなフランスでインスタント大学生になろうとしたのだ。残念ながらその夢は、憎きコロナで渡航できず、同時に金属部会長になってしまったため潰えた。もう計画から三年過ぎてしまった。日本でガンジからめになっており、次のチェックポイントは70歳で、日本のしがらみを断ち切り、パリ生活をやりたいものだ。オペラの『ラ・ポエーム』やヘミングウェイの『移動祝祭日』に出てくる天井裏の寒い部屋に運びあげた薪で暖をとりながらフランス絵画の歴史を勉強する、まだ果たせていない夢だ。一時期はしゃべれたフランス語もだんだん聞き取れなくなってきた。▶京都の映画館の話に戻すと、さらにお世話になったのが伏見にあった伏見会館、伏見東劇だ。就職直前の修士2回生の時、運転免許を伏見自動車学校で集中してとった。授業や実技が複数ある時の時間調整にここで大倉映画を山ほど見た。▶映画といえば、2013年ごろ、松岡正剛の編集工学研究所の勉強コース、守、破をオンラインメールで受講していたとき、指導してくれた師範代の女性が、『灼熱の魂』の話をもっと興奮して話していた。ご自分は興奮しているのだが、そのストーリーは教えてくれないのでネットで探すと、テアトル大阪でその週末までかかっていた。気になって仕方なかったので、わざわざ君津から大阪まで新幹線で観に行った。師範代が興奮するような映画かどうかわからないが、見終わった後しんどい映画だった。多分女性の方がしんどさが違うような気がする。師範代に感想を言ったが会話が弾まなかったことだけは覚えている。確か2010年のカナダ映画だった。いちいち評判を調べる趣味はないが、あの幅の狭い映画館で見た『灼熱の魂』はあるある話であった。▶映画館つながりで、和鐵的に最高傑作と思っているのが、東京の阿佐ヶ谷駅から少し歩いたところにあるユジク阿佐ヶ谷で観た「セシウムと少女」だ。阿佐ヶ谷にはジブリの学校もあり、ここも協力してできた映画だ。阿佐ヶ谷に住む少女ミミちゃんと、太古よりこの国に居る7人のくたびれた神様たちが「逃げたおばあちゃんの九官鳥」を捜して時間や空間を無視して東京中を駆け巡るひと夏の冒険ファンタジーとでも言うておく。中学生レベルの映画好きが実験映画的にいろんな自分の映像を持ち寄ってつなげて「これでも映画です」と夏休みの終わりの宿題として出したような映画だ。でも内容が深い。なんでセシウムが出てくるのか。なんで、文豪喫茶が出てこなければならないのか、意味がわからないほど映像がごった煮になった映画だ。▶その点、コロナ直前の秋に東京のヒューマントラストシネマ有楽町で観た『ディリリとパリの時間旅行』は申し分なく、太鼓判を5個くらい押してもいいフランスアニメ映画だ。フランスの19世紀後半の美しき時代<ベル・エポック>のパリを舞台にしたニューカレドニアからきた少女ディリリの物語だ。映像がべらぼうに美しい。ジブリの背

景の綺麗さや『君の名は』の写実的な背景とは違う、これぞ背景といううっとりと見惚れる色彩豊かなパリの光景が描かれている。その中で、陽気な少女ディリリがいるんな人と出会い、成長し、最後はエッフェル塔の近くの空中で悪の組織に立ち向かい平和を取り戻す、書いていると支離滅裂なストーリーだがこれが本当に面白い。これはAmazonではまだ有料なので2回目を見るのを我慢している。でも「セシウムと少女」は自由にAmazonで見られるので騙されたつもりで（ていうか本当に騙されたと思おうと思えますよ）見てみられればいかと。ご覧になられた方は是非感想を和鐵まで送ってください。なんなら映画パンフレットも見せてあげますよ。映画上映中には出来上がっておらず、お金だけ払ってなしの礫で、約一年くらい経ってから届いた逸品だ。▶映画の話になると無限に思い出が湧き出てくるのでここいらで止めておきます。